

# ネパールの風

98ネパール日記 その・3

後藤 隆徳

(前号のつづき・一部書き替えました)

シコダは酒が廻ると饒舌だった。余り質問しなくても彼から色々喋った。私は30年以上上山に登っているが「プロ」に金を払って山に連れていって貰うのは今回が初めてだ。

8千mに登っているプロのガイドとは、どんなものか興味があった。彼の山に対する思想、知識、技術、体力などを学ぶつもりだった。だが、「私は高山植物には興味がなく、名前もほとんど知らない」の言葉には啞然とした。私のイメージでは「プロとは、あらゆる全てのものに卓越した能力を有する」と考えていただけに、これでは「セミプロ」と改めなければと思った。これは後に改めて知らされることになるのだが。

スエマツは酒が好きらしく、提供した我々の酒を勧めなくても手酌でグイグイやり、賑やかにはしゃいでいた。アリトミはやはりプロらしく人あしらいがうまい。タケモトは早や呂律(ろれつ)が怪しい。

精鋭が揃った感じのA隊に比べ、B隊らしく?実に多彩・多才、かつ「アブナイ」不揃いのリング達だった(こちらのリングは本当に不揃いで小さい)。

第3日目 4月25日(土) 晴 バルク(推定高度1850m) 7:20~バンブー  
- (2230) 15:50

## バンブーに高岡の孫が現れる!?

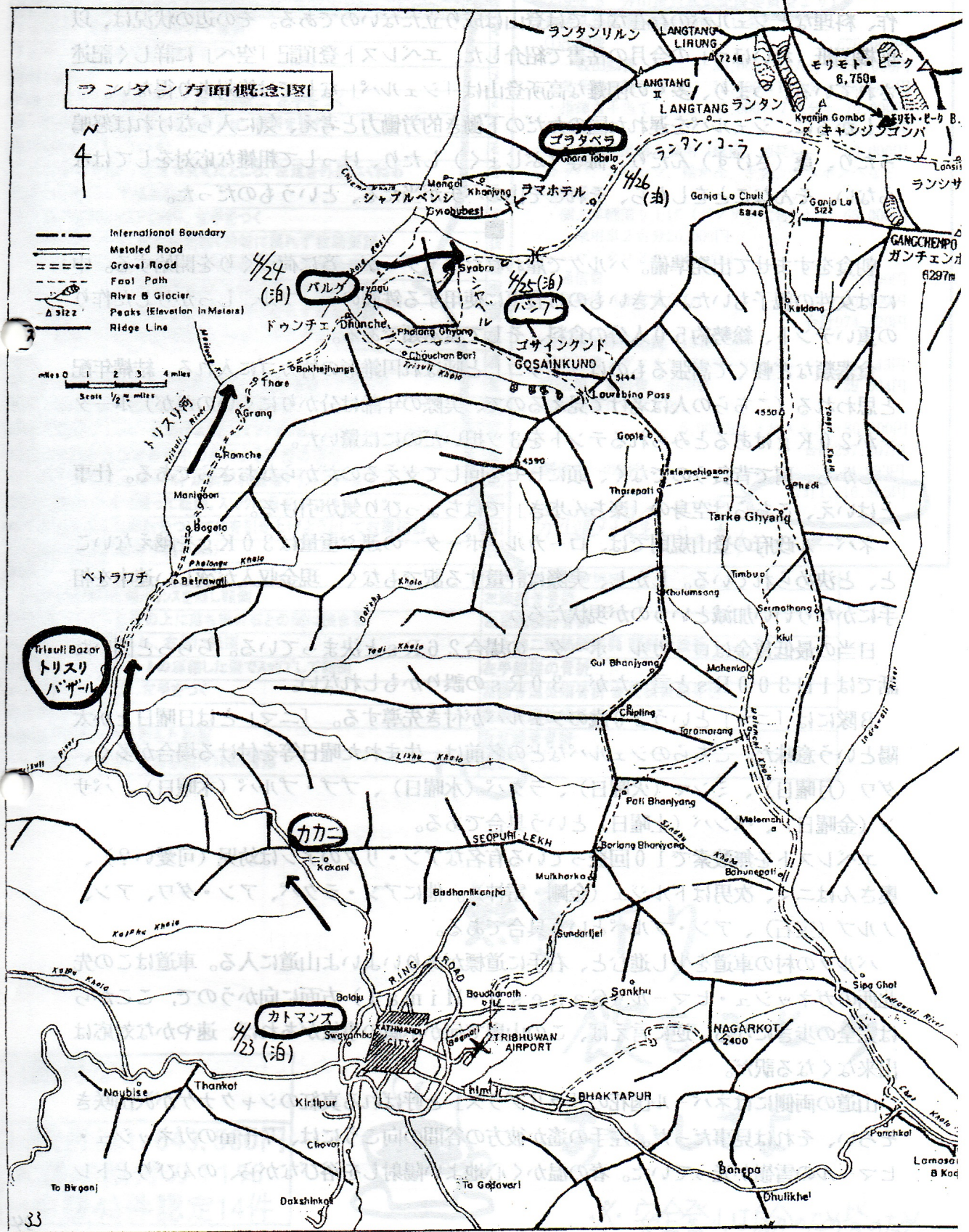
静かな朝だった。カッコウの声で目が覚めた。やや雲が多かったが、北東の方角に大きな雪山が見え朝日に染まっていた。聞くと盟主ランタン・リルン(7225m)西のランタンII峰(Langtang II・6571m)とのこと。

キッチン・ボーイがテントに洗顔用のお湯とモーニング・ティーを届けてくれた。こういうサービスはシェルパ(族)が存在し登山を支援(援護)する制度が確立しているネパールならなもの。ちなみにカラコルム、ブータンなど同じヒマラヤ登山でもシェルパがいない地域では全て自分達で荷揚げ等行わなければならない。

# カトマンズ～ランタン方面概念図

ヤラピークこれです。

ランタン方面概念図



従って多くの困難を伴う高所登山のエベレストにせよマナスルにせよ荷揚げ、ルート工作、料理などシェルパの存在なしでは登山は成り立たないのである。その辺の状況は、以前機関紙「れいほう」の今月の岳書で紹介した、エベレスト登頂記「空へ」に詳しく記述されている。つまり、多くの困難な高所登山は「シェルパ」なしでは絶対あり得ない。

しかるに、シェルパを遅れた国のただの下働きの労働力と考え、気に入らなければ怒鳴ったり、蔑（さげす）んだり、侮辱（ぶじょく）したり、けっして粗雑な対応をしてはならない。そんなことをしたら、それこそ山のバチが当たる、というものだった。



朝食をすませて出発準備。バルクで雇われたポーターが一斉に荷づくりを開始する。中には女性の親子もいた。大きいものは食事に使用する鉄製のテーブル、しっかりした作りの重いテント、総勢約50人分の食料、そして食器類である。

食器類など軽くて嵩張るものは「ドッコ」と呼ばれ円錐形の竹カゴに入れる。結構年配と思われる（こちらの人は老けて見えるので、実際の年齢は分かりにくいのだが）ポーターが20Kgはあるとみられるテントを3ツ担いだのには驚いた。

しかも、肩で背負うのではなく、頭にヒモを回して支えるのだからなおさらである。仕事とはいえ、こちらは空身の「楽ちん歩き」ではちょっぴり気が引ける。

ネパール政府の登山規則では、ローカル・ポーターの運ぶ重量は30Kgを越えないこと、と決められている。しかし、実際は計量する訳でもなく、現金収入が欲しい連中を相手にかなりいい加減というのが現状だろう

日当の最低賃金はローカル・ポーターの場合26Rsと決まっている。ちらっと聞いた話では1日300Rsと言ったが、30Rsの誤りかもしれない。

B隊には「ニマ」という20歳のシェルパが付き先導する。「ニマ」とは日曜日とか太陽という意味だ。こちらのシェルパなどの名前は、生まれた曜日等を付ける場合が多く、ダワ（月曜日）、ミンマ（火曜日）、ラクパ（水曜日）、ププ・プルパ（木曜日）、パサン（金曜日）、ペンバ（土曜日）という具合である。

エベレストを無酸素で10回登っている有名なアン・リタのアンは幼児（可愛い？）、奥さんはニマ、次男はドルジェ（金剛・雷神）。他にアン・ラクパ、アン・ダワ、アン、ノルブ（宝石）、アン・プルパという具合である。

バルクの村の車道を少し進むと、右手に道標がありいよいよ山道に入る。車道はこの先北西のガネッシュ・ヒマール（Ganesh・Himal）方面に向かうので、ここからは完全の歩きになる。逆に言えば、この山奥で何か不慮の事故があれば、速やかな対応は出来なくなる訳だ。

山道の両側にはネパール国花の「ラリグラス」と呼ばれる真紅のシャクナゲが沢山咲きそろう、それは見事だった。左手の遙か彼方の谷間の向こうには、7kmのガネッシュ・ヒマールの雪嶺が光っていた。春の温かく心地よい陽射しを浴びながら、のんびりとトレ



- (上) 朝テントにキッチン  
ホーイカ、モーニング  
ティーとフッキーと  
お湯を届ける
- (中) ドッコを体験歩  
荷するカト  
似合うのである
- (下) バルクで子守をす  
る子供 ニル子  
は多い

ッキングは続く。だけど、あまりゆっくり過ぎてどうもペースが合わない。

それはそうだ、前述のメンバーの中にはヤラ・ピークが目的でなく、ランタン谷トレッキングの者も何人かいる。当然力の差はある訳で、それらを一緒に行動させるツアー会社の計画自体最初から恣意的である。それらのことは事前に話があった訳ではない。募集要領はあくまでヤラ・ピーク登頂なのだから、ある意味では「詐欺」である。この標高なら高山病の心配はなく普通のペースで歩けば日程の2日位は短縮できよう。当然、その分参加費は安くなるはずだ。

公募登山の問題はこんな所にもあるが、まあ、今回はとにかくネパールは初めてなので「学習・勉強」と割り切る。(ただ、ポーターは少なくとも40Kg位の荷物を背負っているので、トレッカーに1日の距離をあまり歩かれると追いつけない事実もある)。

山道には1時間ごとに「バッチィ」と呼ばれる建屋がある。(レストランまたはロッジと表記してある所も多い)これは茶屋・食堂・山小屋または宿泊施設を兼ねたもので飲み物、食事、休憩、宿泊ができる。

住居を兼ねているので夫婦でやっている所が多く、愛想が良く大体子供もいる。高岡は途中のバッチィでヤクの毛の帽子を借りて、現地人になりきってしまった。



明るく乾いた清々しいシャクナゲ街道を進む。両脇には大きなワラビが沢山あり、今夕は是非食べようと皆で大騒ぎをしながら取った。そんな時、一番元気が良いのはやはり加藤である。彼女の場合、日本でもネパールでも全くペースが変わらない。言ってみれば「超国際人」という所で、その辺がシェルパにも一目置かれた所以である。

ワラビはこちらでは食べる習慣がないとのこと。大騒ぎを見て不思議に思われたかもしれない。

ガネッシュ・ヒマールが遠望できるバッチィで民芸品のショルダー・バックを300Rsで買った。最初350Rsだったが330にして300にした。こちらではとにかく値段はあってないようなもの。とにかく値切らなければダメ。50Rsは日本円にすれば、たったの100円だが、こちらではその10倍位。決して言い値で買ってはいけない。

金持ち日本はポーターなどの賃金もそうだが、金があるといって大盤振る舞いをする。結果それが当たり前となり、あとに続く隊の迷惑となる

私は以前シャモニーでみやげ物を値切った「実績」があるが「ああだ、こうだ」と言って交渉するのが面白く、それが現地の人達との交流にもなり楽しい。

ただ、この先のバッチィでA隊の人が現地人が腰に下げている短刀を600Rsで買ったが、後で良く調べてみたら、何と「ホンコン製」だったとのこと。こんなこともあるので注意も必要。私のは匂いを嗅いでみたら、例の「猛烈な匂い」がしたので、現地の人「手」を経ていると思う。多分大丈夫でしょう。

この先には左手に大きなゴンパ(寺院)が見えた。子供が3人道で水遊びをしていた。



（上）

（中）

（下）



（上）ニマを先頭に  
いま出発

（中）途中のバツテイに  
マク帽子をか  
りて現地人になりさ  
った高岡

（下）ドッコで隊荷を  
運ぶホクターたち

遊びは日本と変わらないが、着ている服はボロボロで尻を丸出しの子供もいた。見た目には実に健康的だったが、ネパールの地方の子供は5人に1人は育たない(1991年・ネパール保険省統計)という。厳しい自然と貧困のなかでは飢え、寒さ、病いは弱いものに容赦なく襲うのである。

この辺りでは大きく美しい村、シャブル(Syabru・2230m)に到着し、昼食にする。段々畑の一角を借りてブルーシートを広げる。どこからともなくオバサンが現れニコニコしながらビアとジュースの入った手提げを運んできた。

ちょっと温かったが110Rsのビアを飲んだ。昼食はパン、ジャガイモ、野菜、玉子料理と盛り沢山で食べきれない。

立派な宿泊設備が整った村を通り一旦Chopche・Kholaに下る。途中、村の女性が10人位民家の庭先で車座になり昼食を摂っていた。勿論ここには男はいない。皿に盛った粉状の物をこねて食べていた。了解を取りカメラを向けると、若い女性がすかさず「2Rs」と言った。が、その時、年配の女性が私を睨み、「ダメ、ダメ」と言う仕種で追っ払う。金などいらん帰れ、という感じだ。気ままな観光客に生活を覗かれるのが嫌だったのだろう。あまりの興味本位はいけない。

この辺りで下山してくる小人数の欧米人に沢山会った。クランボン(アイゼン)をザックに下げた本格派もいるし、トレッキング姿の女性も多い。単独はいないが、中にはポーターと2人もいる。こちらはゾロゾロの大人数。

まあ、ネパールの事情に精通し、もろもろの手続きの時間があれば、本来はシンプルな登山がベストだ。それは国内、外でも同じこと。ただ、ネパールに電話一本するのも仕事やらねばならなかったり難しい部分も多い。

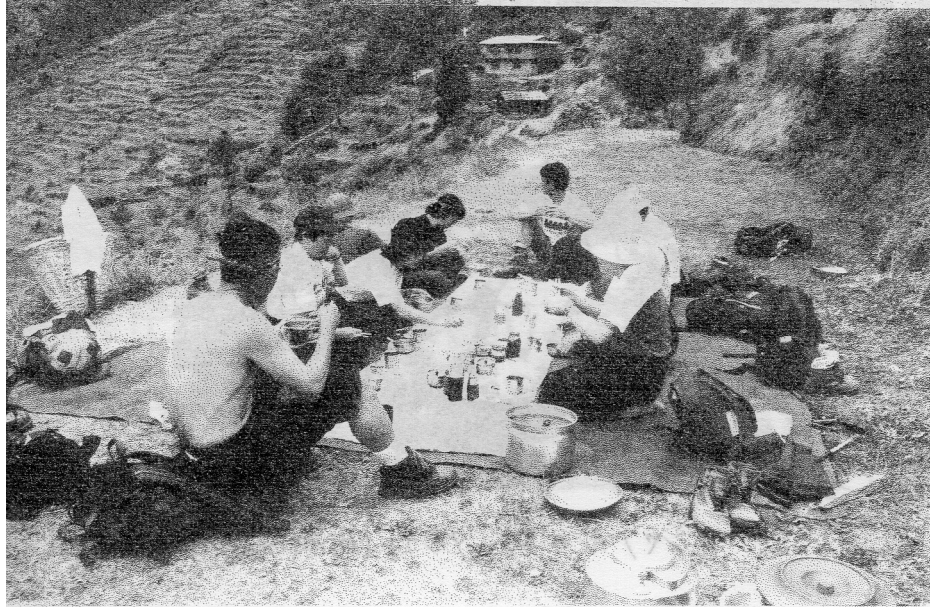
この先のパッティでヤクの帽子を180Rsで買った。ヤクの毛は特別温かいという。入口で女性が機(はた)を織っていた。



ランタン・コーラ(Langtang・Khola)が近づき河沿いの道を進む。辺りは密林が続き、何となくジャングルっぽかった。こんな山奥の道にも牛(ヤク)の糞が多く、踏むと非常に臭いので避けて通るのに気を使う。

程なく今日の宿、バンブーのシェルパ・ロッジ(Bamboo・Sherpa・Lodge・2230m)に到着。谷間の森林の中のロッジだ。テン場のすぐ左はランタン・コーラがドウドウと白濁した飛沫を上げていた。河が白濁しているのは源が氷河だからだ。ロッジの庭でさっそくビアを飲む。ここは150Rs。高度とともに値段が上がるのは万国共通。

シェルパ・ロッジは20歳の若夫婦が主人で4・5歳の女の子(私は男、高岡・加藤は女。外観では分かり難い)が1人。みやげ物も沢山置いてある。若夫婦は店が忙しいのか子供をあまり構わない。そこに恰好の「オバアちゃん」(失礼)の高岡がやってきた。



- (上) 真紅のシャクナゲ  
“ラリガラス”カー  
でないので残念!!
- (中) トレッキング途中  
同行した今泉
- (下) シャブルの昼食  
風景  
昼食はいつもこんな  
感じ



子供は最初遠慮し勝ちだったが、段々と慣れ親しみ次第に甘え、ジャレ、遊び、すっかり高岡の「孫」と化してしまった。回りに同じくらいの子供がいないので可哀相だ。

ここで高岡は私が買ったのと同じショルダー・バックを買った。このものは、同じデザインでも糸が断然細いので、手触りがしなやかで柔らかい。粘りに粘ってかなりまげさせた。夕食後4人テントで軽く飲んで反省会。

第4日目 4月26日(日) 晴のち雨      バンブー (2230m) 7:20~ゴラタ  
ベラ (3010m) 14:40

### 後藤39度の発熱カトマンドゥへ下山か？

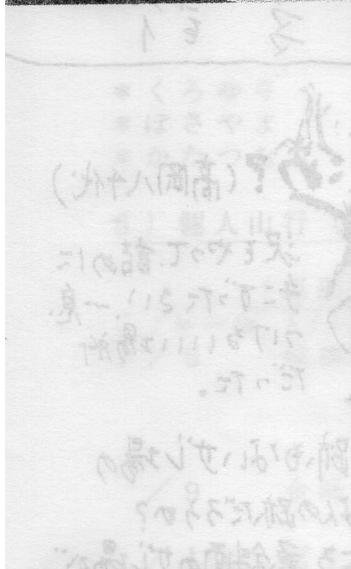
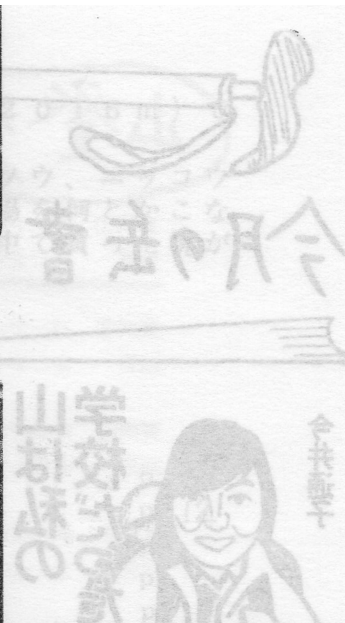
朝のランタン・コーラの流れは静かだった。氷河を源とする河は夜間気温が下がると融氷・雪が少なく、結果下流の流れは穏やかとなる。

例によってキッチン・ボーイがモーニング・ティーと洗顔用のお湯を届けてくれる。朝食はすでに5時に起床したキッチン・ボーイによって作られている。そして、我々が朝食を済ませ出発する頃にはポーターは全て出発した後で誰もいない。まあ、ヒマラヤ・トレッキングとは、いたせりつくせりの世界なのだ。全て自身が行う日本の冬山の方が余程大変である。故にヒマラヤ・トレッキングにはまってしまう人もいる訳だ。 (つづく)

ナマステ・ナマステ



シヤブルの村 タルチョ(祈禱旗)がなびく



(上) 同行した仲間  
 左からフナキ、タ  
 ケモト、キタジマ  
 スエマツ  
 (中) バンブーの高田  
 の孫！  
 (下) バンブーのジェルロ  
 ロッジの若夫婦